

# わが遭難記

坂 場 政 敬

私は昭和十九年二月、事務員として山下汽船に入社し、船内事務習得のため神戸の本社に陸勤しておりました。当時はすでに各地での戦況が悪化し始め、重大な時期に入っていたようです。それにつれて、船舶の被害も多くなり、もちろん秘密にしていたのですが、社船の〇〇丸が爆撃をうけたとか、××丸が雷撃をうけ、乗組員全員行方不明になったとか、悲愴なニュースが社内で密かに流れていました。そのような状況の中で、三月初旬、南方方面に長期就航し、各種の作戦に参加帰港して、神戸三菱造船入渠中の第一吉田丸に乗船しました。前航が長期就航のため、船長以下ほとんどの乗組員が交替しました。乗船初経験の広沢三航士、竜蛇三機士、星野三通士（三名とも遭難時殉職）とともに、在船当番をしながら深更までいまだ経験しない戦争のこと、将来のことなどを話し合ったものでした。出渠後、神戸を出帆し、門司を経由して六連沖に向かいました。同地で待機の状態のまま二日ほど錨泊した後、数隻の船と船団を組み、上海郊外の呉淞港に向けて出帆しました。

悪天候の東支那海を、蛇航しながら無事同港に入港しましたが、入港直前、荷役スタンバイ中の甲板員が艙内に転落して死亡し、また出帆時、甲板長が自室にて遺体となって（心臓発作？）発見されるなど、不祥事が続発し、船内は重い空気に包まれ、前途に不吉なものを感じました。同港にて、中支より南方へ転戦する陸軍部隊約四百名、武器、弾薬、航空用燃料、食料、軍馬などを満載して、比島ミンダナオ島に向け

て出帆しました。

出帆後沖合で、日本より同行の数隻の船団と隊形を整え、護衛艦に護られ、舵航しながら南下しました。各船とも満船状態で船足が鈍く、潜水艦に襲撃されやすいということで、それを避けるため比較的水深の浅い中国大陸の沿岸に沿って南下し、台湾海峡に入りました。夜間は嚴重な灯火管制の隠密航行でしたが、台湾海峡に入る頃には、敵潜水艦に船団の行動を感知されていたらしく、護衛艦より各船に警戒警報が発令され、敵戒体制の中で南下を続けました。南国特有のべた風の航海でしたが、船室は灯火管制のためポールドを閉め、カーテンをしておりますので、蒸し風呂のような暑さでした。

バシー海峡を過ぎ、昭和十九年四月二十六日未明、比島リングエン湾沖にさしかかった時、突如、敵潜水艦の雷撃を受け、第一弾は三番船艙に命中しました。私の部屋はサロンルームに隣接しており、たまたまその時は、起きておりましたが、満船状態の故か、雷撃のショックが意外に小さく感じました。相部屋の広沢三航士が、緊急配置のため船橋に急行したのと同時に、私も状況確認のため至近距離の左舷ポードデッキに行きましたところ、三番船艙からは火柱がものすごい音と共に吹き上がり、その付近は完全に火に包まれて、怒号と助けを求める声が入り乱れ、まさに地獄絵を見る思いでした。三番船艙には、ポトムに航空用燃料を積載し、中甲板に、蚕棚を作り、兵員を収容していたので、その悲惨さはいかばかりと思えました。混乱のため軍の指揮系統も乱れ、右往左往しているうちに、第二弾が機関室を直撃、大爆発音と共に水柱が高く上がり、一時視界が全く見えざられ、付近一帯は水浸しの状態でした。

私は、ポードデッキにへばりつくようにして、滝のように流れ落ちて

くる海水を防いでおりました。そのうちに船の安定に異常を感じると、みるみるうちに船は左舷に傾き始めました。第一弾が命中してから数分経過していたでしょうか。大変短い時間だったと思います。船の傾きがだんだんとひどくなってきましたが、私は乗船経験が浅く、正直なところどうしたらよいのかわからず、また、回りにいるのは軍の人のみで、乗組員は見当たらず、指示を求めることもできませんでした。それにあつという間に最悪の状態になったので、船内の指揮、情報伝達が充分でなく、夜間でもあり、加えて停電となったのでなおいっそう船内は混乱したようです。船の傾斜につれて落下物も多くなり、船に留まる限界を感じ、各自の判断で次々と海中に飛び込むようになりました。私は判断に迷い、退船の判断がおそかったため、すでにすぐ足元まで水がきておりました。飛び込んでから少しでも船から離れようと思いました。間もなく本船の沈没による渦巻に巻き込まれ、海中で玉つきの玉のように翻弄され、苦しさのあまり何回か海水を飲みました。

幸いに救命胴衣を携行していたので、浮揚力があり、思ったより早く浮かび上がったのかもしれませんが。しかし激しい水流と水圧に、着衣はずたずたに引き裂かれ、裸同然となり、浮流物による擦過傷を負い、全身傷だらけでした。その後、平静に戻り、暗闇をすかして回りを見ると、もちろん本船の姿はなく、おびただしい浮流物と、救命胴衣を着用した兵員の死体が累々として漂っておりました。

そのうち、生存した者同士があちこちで小グループを作り、声をかけ合ったり、軍歌を唄ったりしてお互いに元気づけているようでした。私の回りには乗組員の姿は見当たらず、生き残りは私一人かと思ひ、それと同行の船団や護衛艦の姿は見られず、このまま置き去りにされるのかという不安もあり、疲労も重なって、大変心細い思いでした。

やがて東の空が明るくなり、太陽が海面を照らし始めると、だんだんと付近の様子がはっきりとしてきたので、いままでの不安な気持も多少うすらいできました。回りに漂流していた多量の浮流物と兵員の遺体は、潮の流れに乗って四散したのか、ぼつぼつと点在する程度でした。

その後、救命胴衣につかまり漂流を続けましたが、時間がたつにつれて体の力がぬけたようになり、思考力も鈍り、もうどうにでもなれといった心境になりました。幸いにも、南方の海で海水温度が高いため、身体がもちましたが、北方の海なら助からないところでしょう。

漂流し始めてから約四時間程度経過したでしょうか、はるか前方に船らしいものがぼつんと見え、それがみるみるうちに近づくにつれ、日本の艦とわかりました。それでもすぐには救助活動には入らず、われわれの回りを微速で何回か旋回しながら近づいてきました。艦上で忙しく動いている乗組員がはっきりと見えるようになると、初めて救助されるんだなという実感が湧いてきました。やがて、われわれの前で艦が停止し、救助が始まりました。「頑張れ!!　しっかりしろ!!　こっちへ来い!!」艦上からの激励の声に励まされ、わずかな距離でしたが、必死になつて泳ぎました。疲労のため思うように前に進みませんでした。やっとの思いで舷側にたどりつき、救助網にしがみつきました。

その頃は、長時間海水につかっていたため、皮膚がふやけて白くなり、感覚もなくなりつつありました。そのため腰から下に力が入らず、救助網をはい上がることができず、一時小休止の状態していると、艦上から「しっかりしろ!!　頑張れ!!　急ぐんだ!!」と気合を入れられ、無我夢中でさほど高くない舷側をはい上がり、デッキまでもう少しのところまで、乗組員に艦上に引き上げられました。立つことができず、その場にへなへなと坐りこんでしまいました。すると、また「しっかりしろ

!!」と気合いをかけられ、何やら度の強い酒（ウイスキー？）を少量与えられ、抱きかかえられて艦内に收容されました。

傷の手当を受けてからその後だんだん平常に戻り、安心感と共に元氣が出てきましたので、艦内を見て回りますと、狭い艦内（二、三〇〇トン級の最後に風のつく駆逐艦だったと記憶する）は、私同様救助された人々で、超満員の状態でした。ほとんどは軍人でしたが、その中からぼつぼつと懐かしい第一吉田丸の乗組員の顔を発見しました。それにしても、全乗組員の数からすればわずかな人数ですので、他の人達はきっと別の護衛艦に救助されているよと話し、お互いに慰め合いました。艦の乗組員の話によると、被害は本船のみで、船団の中では大型でもあり、それに超満船だったので、最初に狙われたのではないかとのことでした。本船が襲撃されると同時に、他の船は全速で避航し、マニラに向かったそうです。

救助が終了したのか、足許で響いていたエンジンの音が急に高くなり、それに船の振動も激しくなってきたので、かなり高速で航海し始めたようです。通りがかりの水兵さんに聞くと、「あんた達を雷撃した敵潜水艦がまだこの付近にいるので弔い合戦だ」といっておりました。かなり経ってから、艦内に激しい合図のブザーがなり渡り、回りが急に騒々しくなったと思うと、腹の底から突き上げるような衝撃が数回ありました。それは爆雷攻撃の際の衝撃だったのですが、その結果のほどは聞かされませんでしたので、戦果はなかったようでした。その後、索敵のためか、高速で行動する艦のデッキの上で、いろいろの出来事が思い出され、また傷の痛みのため眠れぬ一夜を過ごしました。艦は索敵の任務を終えたのか、われわれ遭難者を乗せて、翌日マニラに入港しました。上陸してからの情報によると、本船乗組員生存者十数名、陸軍部隊

生存者数十名とのこと、惨たんたる結果に一言言葉もありませんでした。

神戸碇泊中、新船員として、司厨員見習が十三名（？）乗船してきました。いずれも幼顔の面影が残る十五、六歳の少年達で、輸送する陸軍部隊のほう炊要員でした。私は彼等全員を軍属宣誓の手続きのため、所属する暁部隊に引率してゆき、帰りに地方出身の彼等を神戸市内見物に案内して、大変喜ばれたことがありました。その彼等と、一沫の不安を抱きながらも、若々しい希望を持って共に乗船した広沢三航士、竜蛇三機士、星野三通士ら思い出の深い人達は、全員帰ってきませんでした。あの少年達や、同僚を失ったことは、戦争とはいえあまりにも悲しい出来事でした。時が経つにつれ、残念ながら当時の怒りや悲しみの気持が風化され、また記憶がうすれてまいりましたが、今回三十数年前の記憶をたどりながら書き進むうちに、改めて戦争の悲惨さを思い起こしました。